

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 65 歳の男性。左眼の霧視を主訴に来院した。左眼に軽度の前房炎症と硝子体混濁を認める。2 年前に同様の症状で治療歴がある。左眼眼底写真、フルオレセイン蛍光眼底造影写真の早期像および後期像を別図 1A, 1B, 1C に示す。診断に有用なのはどれか。
 - a 硝子体病原体 PCR b 血清特異的 IgG 抗体 c 前房水 IL-10/IL-6 比
 - d インターフェロン γ 遊離試験 e 抗原血症検査(HRP-C7 法, C10/C11 法)
- 2 視野検査の結果を別図 2 に示す。
視交叉部以外の病巣の存在を示唆するのはどれか。2 つ選べ。
 - a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 3 眼疾患と読書速度の関連についての臨床研究を行った。解析結果を別図 3 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
 - a 観察研究である。 b 箱ひげ図が示されている。
 - c 緑内障には外れ値がみられる。 d 4 群の比較を行うには対応ある t 検定を行う。
 - e 網膜色素変性患者の読書速度の平均値は中央値よりも高い。
- 4 ある研究の結果を別図 4 に示す。
この研究デザインはどれか。
 - a 横断研究 b コホート研究 c 症例対照研究 d メタアナリシス e 無作為化比較試験
- 5 疾患の有無と検査結果を別図 5 に示す。
特異度の計算で分子となるのはどれか。
 - a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 6 8 歳の男児。野球のボールで左眼部を打撲し、嘔気、眼痛および複視を訴えて来院した。視力は左 1.0。眼圧は左 13 mmHg。CT 像と Hess 赤緑試験の結果を別図 6A, 6B に示す。
本人、家族への説明で正しいのはどれか。2 つ選べ。
 - a 早急に手術が必要です。 b 脳神経外科を受診してください。
 - c 鼻をかまないようにしてください。 d 骨折は軽微なので様子をみましょう。
 - e 腫れが強く評価が難しいため、1 週後に再診してください。
- 7 62 歳の女性。複視を主訴に来院した。30 年前に網膜剥離手術の既往がある。頭部 MRI 画像を別図 7 に示す。
存在する異物の素材はどれか。
 - a チタン b シリコン c アクリル d ハイドロゲル e ポリメチルメタクリレート (PMMA)
- 8 57 歳の男性。1 年前から右涙嚢部に腫瘤を触れていたが、徐々に増大し、最近、流涙と眼脂が出現したため来院した。眼窩造影 MRI 画像と生検時に得られた病理組織像を別図 8A, 8B に示す。
適切な対応はどれか。
 - a 経過観察 b 拡大切除術 c 抗菌薬投与 d 涙嚢鼻腔吻合術 e 涙管チューブ挿入術
- 9 64 歳の女性。左眼の眼脂と充血を訴えて来院した。近医で結膜炎と診断され、抗菌薬を含む複数の点眼薬が処方されたが改善せず、症状は 3 か月間続いている。前眼部写真を別図 9 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
 - a 腫瘍性変化を疑う。 b 外科的治療を試みる。
 - c 涙道完全閉塞の可能性が高い。 d 上涙点から涙小管にかけて硬結を触れる。
 - e 抗菌薬の内服により治癒する可能性が高い。

- 10 6歳の男児。3週間からの結膜充血、流涙、眼痛、開瞼障害を主訴に来院した。軽度の喘息、食物アレルギーの既往があるが、アトピー性皮膚炎は認めない。上眼瞼結膜写真と前眼部写真を別図10A、10Bに示す。

最も適切な初期療法はどれか。

- a 免疫抑制薬点眼を開始し、炎症の鎮静化を待つ。
- b 恒久的な角膜混濁を残す可能性があるので至急掻爬する。
- c 抗アレルギー薬点眼と抗ヒスタミン薬内服で炎症の鎮静化を待つ。
- d 副腎皮質ステロイド内服(プレドニゾロン換算0.5 mg/kg)を開始する。
- e 感染性角膜炎であり、至急入院し抗菌薬の頻回点眼と全身投与を開始する。

- 11 38歳の女性。3日前からの眼痛を訴えて来院した。15年前に眼瞼手術の既往がある。前眼部写真を別図11A、11Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 眼瞼下垂手術
- b 角膜擦過物の検鏡
- c 上眼瞼結膜の観察
- d 副腎皮質ステロイド点眼薬の処方
- e 副腎皮質ステロイド眼軟膏の眼瞼塗布

- 12 84歳の男性。左眼の視力低下を主訴に来院した。矯正視力は左0.06。左眼眼底写真とOCT像を別図12A、12Bに示す。

最も優先される治療はどれか。

- a 網膜光凝固
- b 硝子体手術
- c 光線力学療法
- d 硝子体内ガス注入
- e 抗VEGF薬硝子体内注射

- 13 42歳の男性。左眼の視野異常に気づき来院した。眼底写真と近赤外光眼底画像を別図13A、13Bに示す。

この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 停在性夜盲の一種である。
- b 角膜にも病変がみられる。
- c ビタミン補充療法が有効である。
- d 網膜由来の新生血管を発生する。
- e CYP4V2遺伝子異常が原因である。

- 14 85歳の女性。1か月前からの右眼の視力低下を主訴に来院した。矯正視力は右0.2。眼底写真、水平断OCT像、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図14A、14B、14C、14Dに示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 女性に多い。
- b 両眼発症はまれである。
- c 自然治癒がしばしばみられる。
- d 網膜光凝固が第一選択である。
- e 欧米人よりもアジア人に頻度が高い。

次の2問に答えよ。

在胎23週5日、576gで出生した。現在、修正週数32週である。新生児集中治療室で診察を行った。前眼部写真と眼底写真を別図15A、15Bに示す。

- 15 観察される所見はどれか。2つ選べ。

- a ridge
- b 瞳孔硬直
- c 硝子体出血
- d 水晶体血管膜
- e 牽引性網膜剥離

- 16 本症例に対する方針で最も適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 網膜光凝固
- c 網膜冷凍凝固
- d 抗VEGF薬硝子体内注射
- e 90%前後の血中酸素濃度の保持

- 17 62歳の女性。左眼の視力低下を主訴に来院した。矯正視力は左0.2×-7.50D。中心窩温存内境界膜剥離を併用した硝子体手術を施行し、術後2週で来院した。術前後のOCT像と術後の眼底写真を別図17A、17Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 強膜内陥術
- c 硝子体再手術
- d 抗VEGF薬硝子体内注射
- e 副腎皮質ステロイドテノン囊下注射

- 26 10歳の男児。学校の健診で異常を指摘されて来院した。パネル D-15 テストの結果と記入用紙を別図 26A, 26B に示す。
正しいのはどれか。
a 1 型色覚である。 b 異常 3 色覚である。
c 色覚異常の程度は軽度である。 d 赤と緑を並べて区別ができない。
e 日本人の 5% に同様の異常がみられる。
- 27 6歳の男児。感冒症状の 5 日後から、急激に両眼が見えなくなったため来院した。視力は両眼ともに光覚なし。対光反射は微弱である。抗アクアポリン 4 抗体、抗ミエリンオリゴデンドロサイト糖蛋白(MOG)抗体および髄液オリゴクローナル IgG バンドはいずれも陰性である。両眼の眼底写真と脂肪抑制 MRI 画像を別図 27A, 27B に示す。
正しいのはどれか。
a 母系遺伝する。 b 難治性吃逆を伴う。 c 視機能予後は良好である。
d 抗 GQ1b 抗体が陽性である。 e 副腎皮質ステロイドに依存性である。
- 28 78歳の男性。起床時に右眼の見えにくさを自覚したため来院した。視力は右 1.0(1.2×-0.25 D)、左 1.0(1.2×-0.50 D)。高血圧、糖尿病の既往がある。右眼に相対的瞳孔求心路障害を認める。赤沈と CRP は正常である。眼底写真、視野検査の結果および眼窩 MRI 画像を別図 28A, 28B, 28C に示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 血漿交換 c 高圧酸素療法
d ステロイドパルス療法 e 免疫グロブリン大量点滴静注
- 29 46歳の男性。両眼の視力低下を主訴に来院した。矯正視力は右手動弁、左 0.01。眼圧は右 19 mmHg、左 18 mmHg。1 か月前の矯正視力は右 0.01、左 0.05。甲状腺機能亢進症に対して内科で治療中である。9 方向眼位写真、視野検査の結果および眼窩 MRI 画像を別図 29A, 29B, 29C に示す。
適切な治療はどれか。2 つ選べ。
a 眼窩減圧術 b 瞼板縫合術 c 下眼瞼延長術
d 下直筋後転術 e 副腎皮質ステロイド点滴静注
- 30 18歳の男子。発熱後に左眼の視力低下を自覚したため来院した。矯正視力は右 1.5、左 0.01。眼圧は右 12 mmHg、左 9 mmHg。ネコの飼育歴がある。両眼の眼底写真を別図 30 に示す。
原因となるのはどれか。
a *Bartonella henselae* b *Campylobacter jejuni* c *Haemophilus influenzae*
d *Legionella pneumophila* e *Pseudomonas aeruginosa*
- 31 50歳の女性。明所で 0.1% ピロカルピン塩酸塩を両眼に点眼した前後の前眼部写真を別図 31 に示す。
正しいのはどれか。
a 患眼は左眼である。 b 患側の発汗障害がある。 c 対光反射は正常である。
d 障害部位は毛様体である。 e 慢性期には急性期に比べ患眼が縮瞳する。
- 32 80歳の女性。10 年前に両眼の白内障手術が施行され、矯正視力は両眼ともに 1.2 であった。5 年前から緑内障治療中で半年前から霧視と視力低下を認めたため来院した。矯正視力は右 0.5、左 0.03。眼圧は両眼ともに 12 mmHg。過去 3 年間の視野検査の結果を別図 32 に示す。
まず行うべき対応はどれか。
a 緑内障手術 b 認知機能検査 c 頭蓋内病変精査
d 後発白内障手術 e ステロイドパルス療法

33 検査に用いる器具を別図 33 に示す。

正しいのはどれか。

- a 眼底は倒像で観察される。 b 隅角は鏡像で観察される。 c 検査には散瞳が必要である。
d 緑内障手術での使用に適している。 e 隅角観察部の鏡の角度は 73° である。

34 緑内障患者の右眼 Humphrey 自動視野(24-2 プログラム)検査の結果を別図 34A に示す。

この患者の視神経乳頭部写真は別図 34B のどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

35 74 歳の男性。右眼霧視を主訴に来院した。矯正視力は右 0.4, 左 1.0。眼圧は右 32 mmHg, 左 17 mmHg。糖尿病があり内科通院を継続しているが治療薬の処方はない。右眼前眼部写真, 眼底写真, フルオレセイン蛍光眼底造影写真の早期像と後期像を別図 35A, 35B, 35C, 35D に示す。

優先される対応はどれか。2 つ選べ。

- a 視野検査を行う。 b 脳神経外科に診察依頼する。
c 血糖コントロールを強化する。 d 副腎皮質ステロイドテノン嚢下注射を行う。
e プロスタノイド受容体関連薬の点眼を開始する。

36 57 歳の男性。眼圧は両眼ともに 30 mmHg。右眼前眼部 OCT 像を別図 36A に示す。

本症例の隅角写真は別図 36B のどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

37 45 歳の男性。仕事の中に左眼に違和感を感じたため来院した。視力は左 0.05(矯正不能)。眼圧は左 5 mmHg。左眼前眼部写真, CT 像, 広角眼底写真, OCT 像を別図 37A, 37B, 37C, 37D に示す。

行うべき処置はどれか。3 つ選べ。

- a 網膜光凝固 b 白内障手術 c 硝子体手術 d 強膜内陥術 e 角膜移植術

38 32 歳の男性。外傷性黄斑円孔に対し硝子体手術を行った。翌日の前眼部写真を別図 38 に示す。

まず行うべき適切な対応はどれか。

- a 経過観察 b ピレノキシン点眼 c 高浸透圧利尿薬 d 白内障手術 e 気体-液置換

39 13 歳の男子。昨日野球ボールが右眼に当たり、視力低下を主訴に来院した。視力は右 0.2(矯正不能)。右眼眼底写真と黄斑部 OCT 像を別図 39A, 39B に示す。

現時点での適切な対応はどれか。

- a 経過観察 b 網膜光凝固 c トリアムシノロンアセトニドテノン嚢下注射
d 副腎皮質ステロイド全身投与 e 硝子体手術

40 82 歳の女性。白内障手術後の眼脂に対してニューキノロン点眼薬が 2 週間投与されたが、眼脂が消失しなかったため来院した。眼脂のグラム染色像を別図 40 に示す。

次に処方すべき抗菌点眼薬の系統はどれか。

- a キノロン系 b セフェム系 c アゾール系 d ペニシリン系 e グリコペプチド系

41 72 歳の女性。3 日前から左内眼角部の発赤、腫脹および疼痛が出現し、徐々に疼痛が増悪したため来院した。顔面写真を別図 41 に示す。

適切な治療はどれか。2 つ選べ。

- a 涙嚢マッサージ b 涙道プジー c 抗菌薬全身投与
d 副腎皮質ステロイド全身投与 e 涙嚢切開

- 42 生後1週の新児。生後から右内眼角部に暗青色を認めたため来院した。顔面写真と頭部CT像を別図42A, 42Bに示す。
この疾患で来すことが多いのはどれか。
a 弱視 b 蜂巣炎 c 自然治癒 d 呼吸障害 e 急性涙囊炎
- 43 65歳の女性。右眼の視力低下を主訴に来院し、ある手術を受けた。術前と術後3か月の角膜トポグラフィの結果を別図43に示す。
行った術式はどれか。
a 白内障手術 b 翼状片手術 c 角膜内皮移植術
d 全層角膜移植術 e 治療的レーザー角膜切除術
- 44 52歳の女性。両眼の視力低下と羞明を主訴に来院した。過去にLASIK手術を両眼にそれぞれ2回受けている。両眼の前眼部写真を別図44に示す。
視力低下の原因疾患として最も考えられるのはどれか。
a 角膜拡張症 b クリスタリン角膜症 c 顆粒状角膜ジストロフィII型
d 上皮迷入(epithelial ingrowth) e びまん性層状角膜炎(diffuse lamellar keratitis : DLK)
- 45 50歳の女性。長期にわたる両眼性の眼瞼炎と角結膜炎に対して保存的に治療されていた。現在、矯正視力は両眼ともに0.01以下である。前眼部写真とOCT像を別図45A, 45Bに示す。
考慮すべき治療はどれか。2つ選べ。
a 羊膜移植術 b 角膜内皮移植術 c 全層角膜移植術
d 治療的レーザー角膜切除術 e 自家培養口腔粘膜上皮移植術
- 46 64歳の男性。右眼の異物感を自覚したため来院した。数年前に他院で角膜移植術を受けている。細隙灯顕微鏡写真を別図46に示す。
正しいのはどれか。
a 移植片の拒絶反応を生じている。 b 縫合糸が緩んでおり、抜糸をする。
c 患者が受けた手術は角膜内皮移植術である。 d 速やかに副腎皮質ステロイドの頻回点眼を行う。
e 異物感に対して治療用ソフトコンタクトレンズで対応する。
- 47 81歳の女性。右眼飛蚊症を自覚したため来院した。1年前に角膜移植を受けている。細隙灯顕微鏡写真と前眼部OCT像を別図47A, 47Bに示す。
本患者が受けた角膜移植の術式はどれか。
a LKP : lamellar keratoplasty (層状角膜移植術)
b PKP : penetrating keratoplasty (全層角膜移植術)
c DALK : deep anterior lamellar keratoplasty (深部層状角膜移植術)
d DMEK : Descemet membrane endothelial keratoplasty (Descemet 膜角膜内皮移植術)
e DSAEK : Descemet stripping automated endothelial keratoplasty (Descemet 膜剥離角膜内皮移植術)
- 48 43歳の男性。右眼の手術後1週の眼底写真とOCT像を別図48A, 48Bに示す。
この手術の合併症でないのはどれか。
a 乱視 b 硝子体出血 c 網膜下出血 d 眼球運動障害 e 医源性鋸状縁断裂
- 49 60歳の男性。左眼の原発開放隅角緑内障に対して眼内アプローチでの線維柱帯切開術が施行された。左眼圧は手術前21 mmHg, 手術翌日6 mmHg, 軽度の前房出血を認める。手術翌日の隅角部の前眼部OCT像を別図49に示す。
この患者への説明として正しいのはどれか。
a 早急な硝子体手術が必要である。 b 早急な毛様体縫着術が必要である。
c 今後の眼圧再上昇に注意する必要がある。 d 副腎皮質ステロイドの内服治療が必要である。
e 房水主流出路を介した眼圧下降効果がよく効いている。

- 50 生後7日の新生児。左眼に比べ右眼のまぶたの膨らみが少なく、ややくぼんでいるように見えるとのことで産婦人科から紹介されて来院した。両眼の超音波Bモード像を別図50に示す。

右眼で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 1年後再診する。
- b 点眼を処方する。
- c 眼球摘出を考慮する。
- d 義眼の作製を勧める。
- e 小児科へコンサルトし、全身疾患の合併等の精査を依頼する。